

言語聴覚障害児者の地域支援と 社会のアドボカシーの醸成にむけて

志磨村 早紀、小杉 裕子、畠山 恵、
氏田 直子、小森谷 晴代、小林 美穂、
藤田 芝圭美、鑑 重美、北 義子



言語聴覚障害の困難さは、他の障害と比べて可視化されるものが少なく、その困難さが社会に共有されず、誤解や孤立を招くことがあります。また、ライフステージの移行に伴い、支援や社会資源・情報との結びつきが薄れることも少なくなく、現状は、言語聴覚障害児・者に対する地域支援や社会のアドボカシー醸成が十分に進んでいるとは言いがたい状況です。こうした背景のもと、私たちは ①個別事例的探求、②イベント開催における探求、③社会への発信 を通して、言語聴覚障害児・者への地域支援のあり方を模索し、社会におけるアドボカシー醸成を目指して、2023 年度より本研究テーマのもと、活動を進めてまいりました。本通信では、今年度の活動の中でも ②イベント開催における探求 として開催したイベントの報告をいたします。

2025 年 9 月 15 日に武蔵野大学 武蔵野キャンパスにて「第 3 回 聴覚フェスティバル 2025 -多様な聞こえでつながる世界-」を開催いたしました。聴覚フェスティバルは 2022 年から開催しており、聴覚障害当事者・家族・支援者らの「つながりの場」としてその機能を果たしてきました。今回は、413 名の来場があり、その関心の高さがうかがえ

るとともに、聴覚フェスティバルの意義を再認識する機会となりました。今回の聴覚フェスティバルでは、聴覚障害をテーマにしたドキュメンタリー漫画『淋しいのはアンタだけじゃない』の作者である吉本浩二さんとの特別対談や、聴覚障害に関連する企業・団体の展示、親子企画、聞こえの説明書作成ワークショップなどのさまざまな企画を設けました。とりわけ、聴覚フェスティバルの「名物」ともなっている、当事者同士の対話の場「聞こえカフェ」では、各々の悩みや思いを話し合い、参加者からは「同じ当事者の方と悩みを共有できて心が軽くなった。」といった感想が寄せられました。

参加者アンケートでは、回答者の 98%が「満足」「やや満足」と回答し、今回も「つながりの場」としての機能を評価いただいたとともに、参加者の「しあわせ」をカタチにすることができたと感じています。全体感想として、「大学を会場にしたこのような企画の参加は初めてで、刺激を受け、また視点が広がりました。」「難聴について知ろうとしても情報が少なく、自分の中だけで悩んでいるだけでした。社会的状況も難しくさせている原因だと感じました。当事者だけが背負う問題ではないと思います。」といった声が寄せられました。

引き続き、言語聴覚障害児者への適切な支援の具体化、家族支援のあり方、社会におけるアドボカシーの確立を目指し、探究社会への発信を継続していきたいと思います。

大学 Web サイトにも開催報告・報告動画が掲載されています。ぜひご覧ください！

